

## P2-19-1 ART 妊娠と分娩時出血について

浜松医大<sup>1</sup>, 川崎市立看護短期大看護科<sup>2</sup>中村友紀<sup>1</sup>, 山崎香織<sup>1</sup>, 古田直美<sup>1</sup>, 谷口千津子<sup>1</sup>, 住本和博<sup>2</sup>, 伊東宏晃<sup>1</sup>, 杉原一廣<sup>1</sup>, 金山尚裕<sup>1</sup>

【目的】近年、生殖補助医療（ART）後妊娠では、母児の有病率が上昇する可能性が指摘されている。とりわけ、ART 後妊娠症例の分娩時に出血量が多いとの統計結果がいくつか報告されているが、その原因や病態は明らかではない。そこで、当院のデータベースを用い、ART による妊娠、AIH による妊娠と自然妊娠において分娩時出血量、一部の症例では胎盤病理所見を検討した。【方法】2009 年 6 月～2012 年 2 月の期間に当院で出産された妊婦を対象として、ART 群（75 人）、AIH 群（28 人）と同一年齢の自然妊娠群（637 人）に分類し、分娩様式と分娩時出血量を比較検討した。全胎盤がホルマリン保存されていた 40 症例についてランダムサンプリングを行い HE 染色の所見を検討した。【成績】ART 群、AIH 群、自然妊娠群全体の平均出血量は  $976.5 \pm 1130.5$  (SD) g,  $674.3 \pm 642.2$  g,  $531.0 \pm 433.7$  g であった。ART 群は有意に出血量が多かった ( $P < 0.01$ )。特に経陰分娩例では ART 群、AIH 群、自然妊娠群は、 $1227.9 \pm 1322.3$  g,  $709.9 \pm 687.0$  g,  $553.8 \pm 441.1$  g であり、ART 群は有意に出血量が多かった ( $P < 0.05$ )。胎盤病理に関しては、胎盤の剝離において重要な役割を果たす胎盤基底版の所見に注目して現在検討中である。【結論】体外受精で妊娠した場合には経陰分娩の分娩時出血量が優位に多く、慎重な周産期管理が必要であることが示唆された。分娩時出血量と胎盤病理所見との関連について報告する予定である。

## P2-19-2 ART 妊娠における異常分娩症例についての検討

金沢医大

山口直孝, 藤田智子, 岡 康子, 高木弘明, 牧野田知

【目的】ART 妊娠によって分娩する妊婦は年々増加傾向を辿っており、妊婦の高齢化も含めて以前より分娩時異常出血（弛緩出血等）、付着胎盤などが増している。今回、ART 妊娠にて分娩を行った症例を対象に異常分娩症例について検討を行なったので報告する。【方法】対象は 2004 年 4 月より平成 2012 年 3 月までの 8 年間に当院にて経陰分娩に至った自然妊娠 1097 症例と ART 妊娠 32 症例である。分娩時出血量、付着胎盤症例の頻度を自然妊娠と ART 妊娠とで比較し、有意差およびオッズ比、リスク比について統計処理を行った。【成績】自然妊娠妊婦の平均年齢  $35.3 \pm 3.8$  歳 (mean  $\pm$  SD, 以下同じ)、平均分娩時出血量  $286.5 \pm 176.1$  ml であった。これに対し IVF-ET 妊娠産婦平均年齢  $33.5 \pm 3.8$  歳、出血量  $1075.1 \pm 1389.2$  ml であった。分娩異常出血（1000ml 以上）を認めた自然妊娠（15/1097）と ART 妊娠（11/32）との比較では  $P < 0.0001$  Odds Ratio 40.4, Risk Ratio 34.3 と ART 群で高く、付着胎盤も自然妊娠（5/1097）と ART 妊娠（5/32）で  $P < 0.0001$  OR 37.8, RR 25.1 と ART 群で高値であった。【結論】ART 妊婦は自然妊婦より分娩時出血量が多いことが示された。また、ART 妊娠は付着胎盤においても自然妊婦よりも多いことが有意に認められた。ART 妊娠は自然妊婦より分娩異常出血や付着胎盤のリスクが非常に高く、分娩時緊急事態に対応できる体制を怠らないようにすることが肝要である。

## P2-19-3 当院で分娩管理した不妊治療後妊娠症例の検討

呉医療センター・中国がんセンター

楠本真也, 佐村 修, 佐々木晃, 山崎友美, 中村紘子, 澤崎 隆, 水之江知哉

【目的】生殖補助医療（ART）後の妊娠では、自然妊娠に比べ妊娠合併症が増加すると報告されている。しかし、不妊自体が妊娠合併症の発生に関与するとの報告もあり ART が妊娠予後にどう影響を与えるのか不明である。今回、ART による妊娠とその他の不妊治療による妊娠について比較し ART がその後の妊娠に与える影響について検討したので報告する。【方法】2004 年から 2011 年までに当院で取り扱った 8 年間の不妊治療後妊娠による分娩のうち単胎妊娠でかつ初産婦を対象とした。排卵誘発で妊娠した群（以下、OS 群）、AIH で妊娠した群（以下、AIH 群）、ART により妊娠した群（以下、ART 群）の 3 群に分類し、各々の妊娠合併症や新生児予後等について比較検討した。統計は、 $\chi^2$  検定及び、Tukey-Kramer 法を用いた。統計学的有意水準は  $p < 0.05$  とした。本研究は施設内倫理委員会の承認を得ている。【成績】8 年間の単胎初産婦の分娩数は 2863 例で、その内 OS 群 89 例、AIH 群 61 例、ART 群 76 例であった。35 歳以上の高年妊娠の割合は、排卵誘発群は 19% であったが、AIH 群は 48%、ART 群が 44% と約半数を占めていた。母体合併症に関しては、ART 群における胎盤の位置異常（3 例）癒着胎盤（3 例）の胎盤異常（6 例、8%）が他の 2 群（ともに 0%）と比較して有意に高頻度であった。早産率（OS 群：6.7%、AIH 群：6.6%、ART 群：12%）や緊急帝王切開率（OS 群：12.4%、AIH 群：13.1%、ART 群：19.7%）に関しては有意差はなかった。低出生体重児の割合（排卵誘発群：18%、AIH 群：19%、ART 群：11%）や Apgar score 等を含めた新生児予後についても有意差はなかった。【結論】不妊治療後の妊娠は高年妊娠の割合が高く周産期ハイリスクに位置づけられる。特に ART 妊娠では胎盤の位置異常や癒着胎盤に注意が必要であることが判明した。